顧みて…防衛招集の訓練と網走空襲

富丘　堀口清一　『富丘百年史　拓頌』から転載

昭和三年三月二十三日、父寅吉、母サキの長男として生まれて早七十年になろうとしている。人生は長いと思っていたのになんと短いこと。時の早さに驚くほどの年代になってしまった。あと何年の命かと残りの少なさに過去を思い出す。

やっと高等科卒業の頃に戦争が始まる。十七歳の時、勤労挺身隊と称して釧路雄別炭鉱に徴用される。＊注：「当直日誌」に「昭和19年12月13日、４名出発」の記録あり

そして、翌年、地区特設警備隊という名称に変更、軍事訓練の徹底教育を受けるため、農業も家庭も捨て、国のためという美しい言葉で引き出される。悲しいけれど絶対服従、云々を言わせない。網走の男子校を宿舎にした猛訓練の連続でとにかく腹が減る。駒場のお墓の近くの苺畑に苺を食べにそっと抜け出し、ああ満腹だ。

七月十五日、網走のお盆。天気は良いし暖かい。お昼近く空襲警報が入ると同時くらいにグラマン戦闘機の襲来だ。爆音と同時に機関砲の耳を破るような金属音、うなりを立てて飛び交う。

今は亡き佐藤一正が「飛行機が何か引っ張っている」と言う。見ると機体からだんだん離れていく。

「おお爆弾だ。危ない伏せろ」とみんなが目と耳を指で押さえる。目の玉が飛び出したり、鼓膜が破れるのを防ぐためだ。

瞬間、身がしびれるような爆風に驚く。ああもうだめだ。全員死んだと思った。

血まみれになった出てきた奴にやられたかと訊くと、氏原の血と肉だと言う。肉片が帽子にぶら下がっている。おお嫌だなあと思う。

計六人の若者が死んだ。お盆の七月十五日に火葬場の玄関のコンクリートの上に六体を並べて家族が来るのを待つ。長い長い一日だ。月の光に血が青く光る。遺体の両側に一人ずつの死骸衛兵だ。悲しい恐ろしい一日だった。

負けて良かったこの戦争、生涯忘れられない。少年時代の悲しい思い出となっていまだに目に映る光景だ。

そして終戦、食べるものもろくにない衣食に事欠く時代がしばらく続く。（略）

＊注：この文は、「防衛招集」され、「防衛隊員」として過酷な訓練を受けたことと「網走空襲」を体験したことを綴ったものです。堀口清一さんを含め常呂村からも青年たちが防衛召集されました。そして、同じ常呂村から招集され、この空襲の犠牲となったのが氏原幸男さん（注：十七歳）です。

＊注：「豊川区開基百年記念誌」の座談会の中で、可児直喜さんが、「網走の防衛招集隊の男子歩兵舎で、グラマンに爆撃されて、あれくらい恐ろしい目にあったことはなかった。まだ20歳前だったからよけいにこわかった」と語っています。

＊注：網走空襲について…菊地慶一・著の二冊を参考に

『北海道空襲　一九四五年七月十四・十五日の記録』（北海道新聞社）から抜粋

…（米軍機）「四機が北西に進路をとり、〇九四五頃、網走に向かった。この四機は、遠くサロマ湖までの海岸の偵察を行った。しかし…この四機は網走に引き返し、市街の地上施設と港の小型船に攻撃を加えた。網走では、雲が低かったので、爆撃にあたっては高度二五〇〇フィートの上空から、西から東に向かって三〇度の角度で降下し、高度五〇〇フィートで爆弾投下を行った。ロケット攻撃では、高度二〇〇〇フィートから同様に角度三〇度で降下し、高度一五〇フィートで発射した。攻撃は、この他にあらゆる方向からの機銃掃射でも行われた」（松本尚志「網走空襲の記録　アメリカ海軍記録を中心に」を引用しています）　注：一〇〇〇フィート＝約３０４メートル

…「空襲の日、午前十時ころ空襲警報が発令され、網走国民学校校庭（注：現在の網走小学校）で訓練を行っていた防衛隊員は校舎裏庭の防空壕に避難した。防空壕といっても地面に穴を掘った無蓋のタコツボであった。敵機は校舎を狙ってロケット弾を発射したが、それがそれて樹木に当たって破裂し、破片が真下のタコツボに降りそそいだ。

氏原幸男さん（常呂）は心臓を貫かれオーッとうめいた。…（注：氏原さんを含め亡くなった六人を記載）…一つのタコツボに六人が入っていたのは、不幸な偶然だったが、いくつかの壕でやられたという証言もある。

『紅の海　網走空襲犠牲者の記録』から抜粋

…（注：氏原幸男さんの兄／雅義さん〈網走憲兵分隊勤務〉の証言）男子校付近で死者が出たという速報が憲兵隊に入りました。前の晩に弟の幸男が憲兵隊まで面会に来て「しっかりやれよ」と別れたばかりだったので、悪い予感がして自転車で駆けつけました。現場に着いて、戸板に並んでいる戦死者を見たら弟なんですね。唖然としました。…弟の遺体の傷あとからはまだ湯気がたっていましたよ。破片が心臓を貫いたんです。近くの者の話では「オーッ」と言っただけだそうです」

＊注：常呂村から招集された筒井泉さんと土田虎夫さんの２人が『網走空襲の記録』に手記を寄せているので紹介します。

『網走空襲で負傷して』　筒井泉

敗戦の色濃くなった昭和二十年六月二十五日、常呂青年学校在籍中の十八歳と十七歳の生徒に観閲点呼が実施され、甲種合格が宣告された者に七月初旬、防衛招集礼状が伝達され、常呂村から五十名、私も七十歳の老父を一人残して七月十日、網走市の北部第三〇一二四部隊に入隊しました。網走管内各町村から五十名ずつ六班、計三百名が入隊、即日軍事教練が始まり、朝六時から夜は九時まで全員が汗みどろになって猛訓練を受けていました。

曇天の肌寒い日がようやく青空をのぞかせた七月十五日の昼下がり、警戒警報発令にて男子生徒（仮校舎）裏山林内の蛸壺壕に退避した。壕は一・二ｍ×二ｍ、深さ一ｍくらいの長方形で、四名入ったら狭いけれど命令だからしかたがない。その後、空襲警報

が発令…一分くらいで爆音が聞こえて、グラマン艦載機六機編隊が木の葉がくれに見えてきたが、海岸線を常呂方面に飛んでいった。その後五分くらい経ったでしょうか。再び敵機は我々の頭上を内陸目ざして通過したので、安心したのもつかの間、大きく旋回して海上から男子校を目標に襲いかかってきた。

この時、超低空で機上搭乗者の上体も見え、機体から離れた爆弾が我々のいる校舎裏目がけて落下してくるのを見ながら、耳を押さえて顔を覆いながら全員一斉に壕の底に伏した。地上目がけて撃つ機関銃の音もバリバリと空気をつんざく…気がつけば炸裂した爆弾の音や機関銃弾の音で耳はキーンと鳴って、あたり一面蛸壺に立ちこめた鼻をつく火薬の匂い、爆風で帽子は飛ばされ頭から泥だらけ、目を開いたら私の右腕が接していた氏原幸男君の背中から腹部にかけ貫通した穴が開き、鮮血が吹き出し、みるみるうちに壕の底は血の海と化した。

ふとわれにかえり、右手が強い鞭で叩かれたようにしびれて感覚が鈍い。ピリピリと痛いので見れば右手小指の付け根の近くの肉がむしられ、骨が白く見える。近くの戦友がハンカチや手拭いを持ち寄って、傷口に当てて縛ってくれた。一瞬の出来事で、まるで夢を見ているよう…氏原君はうつ伏せたまま息絶えた。

大声で班長を呼び、氏原君の戦死を知らせた。もう敵の飛行機は立ち去ったので漸く蛸壺から抜け出し、戦友に抱えられ、校舎裏玄関まで行き、軍医の到着を待ったが、玄関横に並べられ毛布で覆われていたが、身体中に刺さった爆弾破片の傷の痛さにうめき苦しんでいる惨状は目を覆うばかり…口では表現できない憤りと悲しみを覚えました。

やがて軍医が到着し応急手当が済み、今度は裏山に達部隊が造っていた横穴式の防空壕に収容されたが、腕がしびれるから出血帯を緩めると出血がひどく、締めれば失血するし、喉が渇いても水は飲まされず、苦しい苦しい一夜を一睡もせず明かしました。

翌朝、戦友に伴われて市内の野戦病院まで歩き、診断を受けた。右腕は氏原君の血と自分の血と泥まみれで、硬くなった袖を鋏で切り裂かれ、脱がされ、白衣を着せられ、即時入院させられました。（略）

＊注：この後、義兄が常呂から網走まで自転車で来たこと。野戦病院から旭川陸軍病院へ転送、そして層雲峡分院へ転送、九月に除隊後北見の小林病院への通院、十月末での全快までが綴られています。

＊注：『網走空襲の記録』には、昭和63年に菊地慶一さん宛に届いた筒井泉さんからの手紙のことや筒井さんが昭和22年に戦後開拓で岐阜に入植したこと、昭和45年に「戦傷病者手帳」交付申請をするために書類に添付した「症状経過書」、筒井さんの奥さんの苦労、離農して札幌でビル管理専門技術者として生活したことなど、戦後の歩みもていねいに取材して綴っています。

『生涯の衝撃』　土田虎夫

…網走空襲の日より四十四年の歳月が過ぎ去ろうとしています。昭和二十年七月十五日は、私にとって生涯においてこの日ほど衝撃を受けたことはありません。大げさに表現すれば天地がひっくり返った思いでした。

その日、私たち少年隊は網走桂町網走小学校を宿舎として沿岸防衛隊の任務につき、日夜訓練に従事していました。当日朝の点呼を終え、朝食をとり、再訓練の準

備中でした。突然警戒警報のサイレンが鳴り響き、上官の命令により宿舎裏のタコツボに三人一組で待機しました。ものの七分たらずで爆音と共に私たちの上空に二機ほどの爆撃機が現れ、一瞬の間に立木の枝は打ち落とされ、瞬間、同僚常呂少年隊の氏原君が弾丸を受け即死の状態でした。隣の筒井君も手に弾丸を受け、三ヶ月の重傷入院ををしました。（略）

＊注：爆弾投下について…『紅の海』での証言から

・グランドに落ちた爆弾で、土が頭の上に落ちてきた。それを弾が当たったと騒いでいた。手に負傷した人がいた。

・網走小学校がアメリカ機に攻撃された翌日、僕は網走警備隊の陸軍伍長として着任しました。グランドの校舎寄りのところに爆弾の穴があいていて、そのグランドに召集兵が並んで陸軍少将から訓示を受けました。銃は持っていませんでした。ゴンボ剣くらいは下げていたと思います。

・男子校に爆弾が落ちたというので、小学生だった私たちはそれを見に行きました。グランドには直径七～八メートルほどもある大きな穴が、すり鉢の底のような形になっていて、その深さは大人の身長ほどもありました。まわりには土が盛り上がっていました。

＊注：堀口さんの文で、空腹のため苺畑に侵入して苺を食べたという下りがありますが、『北海道空襲』にも空腹に苦しんだという人の日記を次のように紹介しています。

「七月十九日、鱒浦まで行軍。現地で身欠き鰊をがつがつ食べて腹の足しにした。二十日ころから腹の減りようがものすごくなる。入隊当初は飴でくるんだ豆を食べて、無糖炒り豆なんか見向きもしなかったが、だんだん無くなるとただの炒り豆もむさぼるように食べた。一晩にぼた餅を三回食べた夢を見たのは、除隊の二、三日まえのことだ」

＊注：空襲と空腹の記憶

『紅の海』の著者・菊地慶一さんは招集された数多くの青年たちから証言を得ています。その中で「少年兵たちが語った言葉に共通するものがあった。一つは今も空襲の記憶が脳裏に焼きついて離れないということ。もう一つは腹がすいてたまらなかったということである。これはどの人も必ず語った。飢餓感など、現在の若者たちにはどう説明してもわからないだろう」と綴っています。

＊注：堀口さんが招集された「地区特設警備隊」について

ウィキペディアを参考に概説

…昭和二十年三月、日本陸軍が太平洋戦争末期の本土決戦に備えて国民戦闘組織として編成した臨時の部隊。

地区特設警備隊の編制は、本部と数個の中隊または小隊からなり、佐官または尉官を隊長とする約三百人で構成することが基本とされた。

常置される人員は少数で、本部に隊長と尉官一人・下士官四人、分屯する中隊・小隊がある場合には各隊長と下士官若干が置かれる程度に限られた。残りの人員は基本的に防衛召集した地域所在の予備役・国民兵役人員でまかない、例外的に遊撃戦要員には訓

練済みの在隊者を充てることになっていた。
　装備は、九九式小銃・三十年式銃剣を下士官兵の人数分や、シャベル・十字鍬など若干と定められたが、当分の間は下士官以下の軍刀・小銃・銃剣は常置人員分のみとされた。弾薬は小銃一丁につき三十発だけであった。

＊注：防衛招集と青年学校生徒

　菊地慶一さんは、『紅の海』『網走空襲の記録』で、防衛招集とは何だったのか、十七、八歳の者を兵隊として集められるものなのかが疑問だったとして、防衛庁に問い合わせ、防衛研究所戦史部から回答を得ています。
　回答のポイントは、昭和十七年に施行した陸軍防衛招集規則が昭和十九年に一部改正され、十七、八歳の男子の招集も可能になったこと、在郷軍人とは十七歳以上の兵籍編入者のことであり、予備、後備役の軍人だけをさすものではないこと。
　菊地慶一さんがたどり着いた結論は、兵役制度には「常備兵役、後備兵役、国民兵役」の三種があり、「…防衛招集された青年たちは在郷軍人でもあり、第二国民兵役として招集該当者になるのである。また、防衛招集された青年たちはみな青年学校在籍者だったが、青年学校は小学校に引き続く二年の普通科の上に、女子三年、男子五年の本科が設置されていて、授業の三分の一以上は軍事教練に充てられていた。だから青年学校というのは、軍隊教育につながる軍事予備教育と言ってもよいものであったから、当然、防衛隊編成の一番にあげられたのだろう」と結んでいます。

＊注：防衛隊員三四七名

　防衛隊員の数は、三百、三百五十名など関係者の記憶がばらばらで正確な数字が不明でしたが、『網走空襲の記録』では、防衛研究所戦史部の資料「戦史叢書本土決戦準備」が見つかり、「釧路地区第七特設警備隊が網走にあり、常備兵力七、特命人員三八九となっている。三八九の内訳は、将校二、下士官四〇、兵三四七である。この兵三四七こそ防衛隊員だったということになるのではないか。実際はともかく、資料に残されている具体的な数字はこれ一つしかない。元防衛隊員の証言である三五〇という数字は、これによって一応裏づけられるのではないか」としています。

＊注：常呂から招集された青年たち

　『網走空襲の記録』には、元防衛隊員たちから情報を得た名簿があり、常呂分として28人の名前が載っているので紹介します。
　吉田寛・筒井泉・堀口清一・宇野勝敏・後藤勝・大村辰男・寺町純隆・藤吉輝男・岡田秋春・氏原幸男・可児直喜・山内勝・柴山昭一・横山誠・横山實男・土田虎夫・尾形友市・長野尚平・伊藤利夫・高橋君男・吉田繁・大場靖夫・奥泉義雄・中野・奥泉忠雄・江田忠良・和田信雄・佐々木信雄（注：錦水尋常高等小学校卒業後、昭和19年３月に能取へ移転）
　＊注：堀口さんの文にあった「佐藤一正」さんの名前はありません。
　『網走空襲の記録』の中で、常呂村から召集された筒井泉さんが「防衛招集が伝達され、常呂村から五十名」と書いているので、この他にもいることは十

分考えられます。

＊注：氏原幸男さんの村葬

國枝奉征さん（岐阜）の証言から氏原幸男さんは戦死として村葬で送られたこと、國枝さんの父・國枝一雄さんが在郷軍人として錦水青年学校の指導員をその年の一月まで勤め、村葬では村役場から氏原さんの自宅まで遺骨の護衛指揮官を務めたことが分かりました。

また、常呂町の戦没者を網羅した『鎮魂』には、氏原幸男さんの死を「戦死　陸軍一等兵」と記録しています。

参考資料

『富丘百年史　拓頌』（一九九九年　平成十一年）
注：堀口さんのタイトルは「顧みて」ですが、内容を考えてサブタイトルを付けました
『紅の海　網走空襲の犠牲者の記録』（一九七七年　昭和五十二年）
『北海道空襲　一九四五年七月十四・十五日の記録』（一九九五年　平成七年）
『一九四五年七月十五日　網走空襲の記録』（網走空襲の碑建立委員会　一九九〇年　平成二年）
『鎮魂』（常呂町　一九七三年　昭和四十八年）
『豊川区開基百年記念誌　ふるさと』（一九九五年　平成7年）